

HUG っと！プリキュア

VS

警察戦隊パトレンジャー

feat. 快盗戦隊ルパンレンジャー

HUGTTO! PRECURE

VS

GSP0 TACTICS UNIT

第 29.5 話 VS #29.5

ギャングラーと友達に

別冊！勝手解釈

主要登場人物紹介

はぐ 1. 『HUGっと！プリキュア』

のの

野乃はな《キュアエール》（CV：引坂理絵）

新学期で転校してきた中学2年生の女の子。背が低くて子供っぽいことを気にしており、イケてる大人のお姉さんになることを目指している。何にでも興味を持つが、ドジをして失敗することも多い。突然現れた不思議な赤ちゃん「はぐたん」を守りたいという強い気持ちによって、元気のプリキュア「キュアエール」に変身した。

やくしじ

薬師寺さあや《キュアアンジュ》（CV：本泉莉奈）

はなのクラスの学級委員長。とにかく誰にでも優しい天使のような女の子。母親は女優で、さあや自身も幼い頃は人気子役として活躍していた。でも自分が本当にやりたいことは何なのか悩んでいる。プリキュアとして戦うはなを助けたい、自分も強くなりたいという強い気持ちから、知恵のプリキュア「キュアアンジュ」に変身した。

かがやき

輝 木ほまれ《キュアエトワール》（CV：小倉唯）

はなと同じクラスの、おしゃれで大人っぽい女の子。何事にもクール。元々フィギュアスケートのスター選手だった。ジャンプの失敗がきっかけでスケートから距離を置いていたが、はなたちと出会い、もう一度高く跳びたいという熱い気持ちが蘇る。弱い自分に打ち勝った時、力のプリキュア「キュアエトワール」に変身した。

あいさき

愛 崎 えみる《キュアマシェリ》（CV：田村奈央）

小学6年生。はなの妹・ことりの同級生。絶対音感の持ち主で、音楽が大好き。ヒーローに憧れ、周りのことを過度に気にかけている。家族に反対されたギターをルールーが受け入れてくれたことで、強い友情を感じている。お互いを想い合う気持ちが奇跡を起こし、ルールーとふたりで、愛のプリキュア「キュアマシェリ」に変身した。

ルールー・アムール《キュアアムール》（CV：田村ゆかり）

元クライアス社・アルバイトのアンドロイド。プリキュアを調査するために、野乃家とはなのクラスに潜入したが、はなたちと接したことで心が芽生え始め退職。更にえみると出会ったことで音楽を知り、友情を育んでゆく。お互いを想い合う気持ちが奇跡を起こし、えみるとふたりで、愛のプリキュア「キュアアムール」に変身した。

2. 『快盗戦隊ルパンレンジャー VS 警察戦隊パトレンジャー』

あさか

朝加圭一郎《パトレン1号》(AS: 結木滉星)

熱血下真面目な警察官。一度決めたら一直線で、基本的にルールを重視するが、頭に血が昇ると突っ走ってしまいがち。だが、人々の安全と平和を守りたいという思いも強い。悪事を許さんと犯罪ゼロを目指し、ギャングラーは勿論、ルパンレンジャーを徹底的に否定しているが、戦いの中で快盗が何者なのか考えるようになる。

ひかわさくや

陽川咲也《パトレン2号》(AS: 横山涼)

明るく素直な後輩系男子。お人好しで優柔不断。圭一郎とつかさによく叱られているが、褒められると伸びるタイプと自認している。パトカーの運転を担当し、射撃も得意とする。ギャングラーと対抗するルパンレンジャーを、頭ごなしに否定はしていない。初美花の正体を知らぬまま、一方的な想いを寄せている。

みょうじん

明 神つかさ《パトレン3号》(AS: 奥山かずさ)

クールビューティなサバサバ系女性警察官。気が強く、言葉づかいも男っぽい、世話好き。またぬいぐるみなど可愛いものには目がなかつたり、お化けが嫌いだったりと、意外な一面が多い。圭一郎とは警察学校同期の腐れ縁で、熱くなりがちな圭一郎を諫めることも。ルパンレンジャーに対しては中立的な立場を取る。

高尾ノエル《ルパンエックス/パトレンエックス》(AS: 元木聖也)

26歳。国際特別警察フランス本部から派遣された、潜入捜査官。だがその正体は、アルセーヌ・ルパン家に仕える謎の男。ある時はルパンレンジャーと共にルパンコレクションを奪い、またある時はパトレンジャーと共にギャングラーと戦う。二つの顔、二種の姿に変身することを隠す素振りすらないため、両者を困惑させている。

やのかいり

夜野魁利《ルパンレッド》(AS: 伊藤あさひ)

19歳。大胆不敵な食わせ者。一見軽い調子だが、頭の回転が速くどこか憎めない。何事も即断即決で、ミスは切りかえの速さでカバー。戦う覚悟を決めたら容赦はしない。兄を取り戻すためルパンレンジャーとなった。

よいまちとおま

宵 町透真《ルパンブルー》(AS: 濱正悟)

24歳。クールな腹黒ジェントルマン。感情を表に出さないが、穏やかな口調で毒をはき、涼しい顔で危険な行動をとる。冷静だが、ギャングラーに対すると我を忘れ、周りが見えなくなることも。婚約者を取り戻すためルパンレンジャーとなった。

はやみょうみか

早見初美花《ルパンイエロー》(AS: 工藤遥)

19歳。妹系おしゃれガール。思ったことがついつい口に出てしまう。チーム最年少でマイペースだが、実は一番テキパキしたしっかり者。ガリーなファッションを好む。親友を取り戻すためルパンレンジャーとなった。

プロローグ

私、野乃はな！ 十三歳！ 実はプリキユアなの！

「そんなことは知っているツツ!!」

……………あの。えーこと。

「何故だッ!! 何故子供である君が、あんな危険な目に遭わなければならぬ!!」

……………どっして、こんなことになっ

「先輩、落ち着いてください……」

「圭一郎、少しは彼女たちの意思を尊重して……」

「——咲也!! つかさ!! お前たちは、子供たちに戦わせることに対して、何の戸惑いも感じないのか!!」

「な、何だか分からないけど、すみません……」

「これ、職権の濫用じゃないの?」

「不当逮捕なのです!! このままでは私たち、獄中で生涯を終えるのです!! 嫌なのですう!!」

「国際特別警察機構、Global Special Police Organization——通称GSPPO。」

「異世界犯罪者集団『ギャングラー』に対抗すべく、日本支部では戦力部隊が組織され、また世間を騒がす快盗とも——」

「——とにかくツツ!!」

野乃はな、薬師寺さあや、輝木ほまれ、愛崎えみる、ルー・アムールの五名!!

この……その何だ、このプ、プリ……携帯電話……」

「プリハートだ、圭一郎」

「プリハートはッ!! 我々国際警察の権限により!! 没収させてもらうツツ!!」

……………め、めちよつくウウウウ!!

明日への希望を奪おうとするクライアス社に、敢然と立ち向かう、HUGと！プリキユア!

だがその戦いを子供に任せるにはあまりに危険と判断され、プリハートが警察戦隊パトレンジャーに奪われた!

失った大切な変身アイテムを、取り戻すために抗議する、「プリキユア」!

彼女たち子供の無事を守るため、頑なにそれを拒否する、「警察」! というか主に朝加圭一郎!

君は、どっちを応援する!?

「……『プリキュア』？ ただの噂だろ？」

快盗戦隊ルパンレンジャーが世を忍ぶアジト、ビストロ「ジュレ」にて、魁利がぼやく。

その指で掴まれていた写真に映るは、まさにキュアエール——の、煙で曇ってよく見えない後ろ姿だ。

「どちらにせよ、俺たちには関係のないことだ」
無関心を決める透真。

「背丈からすると、中学生くらい……なのかな？」

だが、高校を中退してまで快盗の道を選んだ初美花にとっては、そうでもないようだ。

「ノン——ところが、そうでもないんだよね」

「ノエル？」
そこに、ノックもせずに入口のドアから現れた、怪しい追加戦士に、振り返る魁利。

「そもそも僕は、フランスで見たことがあるからね。本物のプリキュアに。」

覚えてない？ 去年の秋、パリ中の建物がスイーツに変わって、エッフェル塔が動き出した珍事件。

国際警察が何とか隠蔽したけれど、あの事件を解決したのは、本当は『プリキュア』なのさ。

この写真のプリキュアとは、別のチームのようだけれどね——
「……それがどうした」

「私たちにも、関係があるの？」

悠長に語り出すノエルに、吐き捨てるように低い声を出す透真。前に乗り出す初美花。

『HUGっと！プリキュア！』——それが彼女たちのチーム名さ。

だがその目的は、『はぐたん』と呼ばれる、未来からやってきた不思議な赤ちゃんを守ることにある。

同じく未来からの侵略者『クライアス社』が狙っているのも、そのはぐたんさ

「じゃあ、クライアス社が、ギャングラーと手を組んだ……とか？」

初美花が挙手して、ノエルに問うも。彼は「ノンノン」と、わざとらしく首を横に振った。

「それはなさそうだね。クライアス社は、文字通り『未来』を奪うために現れた。この世界の時間を静止させることだね。それはギャングラーの活動をも、妨害することになる」

「……そんなことされたら、私たちだって、困るもんね」

「……ああ」

「……」
初美花の言葉に、魁利も、そして無言で透真も同意した。彼ら快盗にも、ギャングラーに奪われた未来が——それを奪い返すという「誓い」があるのだ。

「むしろ、ギャングラーとクライアス社は敵対関係にある。クライアス社が狙っている『はぐたん』を、横取りしようとしているのさ。

それこそ、ルパンコレクションと同じようにね」

「酷い！」

「赤ちゃんをコレクション扱いかよ……」

真つ先に叫ぶ初美花。魁利も同意した。が、透真は。あくまで冷静に、ノエルに問うた。

「……それ程の価値があるっていうのか？ その赤ん坊に」
「ウィー」

あつさりうなずくノエルは、遠い目をしながら。
相変わらず感情のつかめない微笑のまま、つぶやいた。

「まあ、当然だよね……」

本物の『伝説の戦士』である『ふたりはプリキュア』——
キュアブラック、キュアホワイトを、簡単に呼び出せちゃっ
たんだから……」

その言葉に。三人の快盗は、思わず表情をこわばらせた。

一方。国際特別警察機構日本支部——警察戦隊パトレンジ
ヤーの拠点では。

「……………？」

「お仕事……」

「……………体験？」

「はい！」

全力で睨みつける圭一郎。首をひねる咲也、つかさに。
はなは挙手して、笑顔で応えた。

「いやあ、突然の話で、エラいすんませんな」
「構わないよ、ハリーくん……だったね？」

はぐたんを抱っこ紐で抱えながら、人間姿のハリーが頭を
下げる。それを笑顔で迎える、ヒルトップ管理官。

「——管理官!! どういうことですかこれは!!」

怒りの表情で、圭一郎が上司に声を荒げる。

「国際警察のPR活動の一環だよ。我々の活動を深く知って
もらい、それを広めるためにね。」

前につかさが、神奈川県港北警察署の1日警察署長として、
国際警察のPRをしてもらったようにね」

「ですが！」

冷静に部下に説明するヒルトップだったが、圭一郎の怒り
は止まらない。

「報告書も出したはずですよ！ 彼女たちは——」

「ジャーナリストの野乃すみれさんが、我々にコンタクトを
取ってきてね。是非取材のため、『お仕事体験』をさせてほし
いと。そのために、夏休み中である彼女の子供の——」

「はい！ 娘の野乃はなですよ！」

「友人の、薬師寺さあやです」

「……………ほまれ。輝木ほまれです」

「はな先輩の妹の友達の、愛崎えみるなのです！」

「野乃家にホームステイしている、ルルー・アムールです」

「はぎゆり！」

「この子ははぐたん。で、俺が保護者代理で来た、ハリハム・
ハリーや」

「とういわけだ。よろしく頼むよ、圭一郎」

「こちらこそ、よろしく頼みます、管理官。」

あ、そちらの圭一郎兄さんも、な」

「……………!! ぐぬぬぬ……………!!」

……………全ては、ハリーの作戦であった。

はなの祖母が経営する和菓子屋「たんぼぼ堂」からの帰路で、圭一郎たちに確保された五人だったが。

その隙を狙い、ハリーはハムスター——のような妖精形態を駆使して、はぐたんを抱えながら別行動を取った。はぐたんまで捕まり調べられては、不都合が多いからだ。

そして、HUGっと！プリキュアの秘密基地を兼ねる、ハリーの店「ビューティーハリーショップ」で事の顛末を——主にほまれからの抗議をスルーしながら——聞き出し。

ミライパッドの導きから、野乃すみれへの依頼を経由し、今度は逆にこちらから国際警察に乗り込むことになったのだ。

頭を抱え悶える、圭一郎をよそに。

「本格的だなあ。それ、僕たちの制服と一緒だよな？」
興味深そうに、はなたちに近づく咲也。

はなたちは、ピンク、ブルー、イエロー、レッド、パープルという、それぞれのパーソナルカラーまで合わせた、パトレンジャーの女性制服を着込んでいたのだ。

これには、つかさも目を丸くした。

「まさか、戦力部隊の制服まで自作してくるとは……」

「あ、ウチはファッションショップもやってますんで、こういうの得意なんですわ」

まさか、ミライパッドで制服を出したとは言えないため、ごまかすハリー。

「……軽犯罪法1条15号に抵触するから、今日以外は、その制服を着るなよ。警官に間違えられては困るだろう」

どうにか落ち着いた圭一郎が、小声で警告する。要するに、官公職のコスプレは、法律で禁止されているのである。

「……分かってますって、兄さん」

流石に真顔になって、ハリーが承知の意を告げる。

——かくして、プリハートを取り返すための。
はなたちの「お仕事体験」が、始まった——

「……………えっと？」

黙々と、圭一郎が。テーブルの椅子に腰掛け。

「……………圭一郎さん？」

黙々と、圭一郎は。和菓子をお口にしていた。

その様子に、首を傾げるはな、さあや。

「さっきからずっと、このままなのは、一体どうして——」

「サボってるのです？」

「サボってはいない!! 断じて!!」

ほまれ、えみるの指摘を、全力で否定する圭一郎。

「こうやって精神を穏やかにすることで、いつギャングラー

や快盗が現れても出動できるよう、待機しているんだ」

「はあ……」

「本当なのです？」

が、ほまれとえみるは、その回答に不満げだ。

——と、ルールーが目光らせた。

「……………これは、もしかしくなくても」

「ホントだ! よく見たら、お婆ちゃんのお菓子だ」

はなも遅れて、テーブルの上の和菓子が、とても見慣れたものだったことに気づく。何やかや緊張していたのだろうか。

それに応えたのは、咲也だった。

「ああ。ヒルトトップ管理官が、元々和菓子好きでね。」

『たんぼぼ堂』さんの和菓子も、気に入ってるんだ」

「まさか……経費で落として買っているのですか？」

「違うよ！ 自費だよ自費！」

えみるに睨まれ、慌てて否定する咲也。

「じゃあ、国際警察の皆さんは、元々たんぼぼ堂の常連さんだったんですか？」

「……ああ」

さあやの問いに、何故か頭を抱えてうなづくつかさ。

「君たちを私たちが確保したのも、たんぼぼ堂帰らだ。」

だがな——」

腕を組んで、つかさがプリキュアたち五人を見据える。

「プリキュア。君たちは、自分たちの正体を、他人に隠そうとする気はあるのか？」

「？ それは、勿論……」

「はなちゃん……では君たちは、たんぼぼ堂が襲われた時に、何故たんぼぼ堂から出てきて、すぐに変身したんだ？」

あれでは私たちがどこか、たんぼぼさん——はなちゃんのお婆さんにも、正体がバレてしまうぞ？」

「え!? それじゃあ皆さんは、あの時の私たちを——」

「ああ、さあやちゃん。あの猛オシマイダーとやらとの戦いも、全て見ていた。飛び出そうとする圭一郎を止めながらな」

「めちよつく!?!」

「それじゃあ、それを見たから、圭一郎さんは——」

頬がめり込む程押さえた酷い顔で驚愕するはな、開いた口を手で伏せながら事情を悟ったさあやに。

「……そういうことだ」

打って変わって冷静に、圭一郎が語り出す。たんぼぼ堂の

リバイバル新作、希望まんじゅうの包みを開けながら。

「あの戦い、たんぼぼさんも巻き込まれていただろう。」

そんな危なっかしい戦い方をされては、俺も黙ってはいられない」

「……でも！ 私はお婆ちゃんのお店を守りたくて！」

「その前に君たちは、自分の心配をしたほうがいい！」

圭一郎が席を立ち、叫ぶはなの前に立ちふさがる。

「……プリハートを返すわけにはいかない。」

国際警察として、これ以上君たちを、危険にさらすわけには

はいかん！」

「嫌です！ 返してください！ プリハートがなくなっちゃ、

私たちははぐたんを守れない！」

負けじと、圭一郎を見上げるはな。

互いの瞳に、互いの譲れない信念が宿る——

「はな……」

「……圭一郎」

そんな二人の名を、さあやとつかさがつぶやく。

「……ふあ……はぎゅー！」

その様子に気づいてか……はぐたんが泣き出してしまふ。

——先に目をそらしたのは、圭一郎のほうだった。

「咲也、つかさ。ちよつとトレーニング室で走り込みをして

くる。彼女たちを頼む——」

「じゃあ、私も行きます！」

が、今度ははなが、圭一郎の前に立つ。

「……何故だ」

「私も戦えるって！ 証明します！ 圭一郎さんのトレーニングに付いていければ、分かってくれるでしょう!？」

それに、これもお仕事体験の一部です！」

「はぎゅ〜！ はぎゅ〜！」

はぐたんの泣き声がますます響くも、一步も引かないはな。

「……いいだろう。付いてこい」

そして、去っていくはなと圭一郎……

気まずい空気が、しばし流れる。

「……こちらも、分かるとるんです」

泣きじやくるはぐたんをあやしなから、ハリイが口を開く。

「圭一郎の兄さんは、あくまでも善意で動いてくれとるって……」

「圭一郎さん、私たちを——ルールを取り調べした時——」

「私がアンドロイドだと知っても、同じように『人間』の『子供』として接してくれていました……」

えみる、ルールも、実例を出して同意した。

「ま、だからこそ、こじれちゃってるんだけどね……」

と、嘆息しながら、ほまれがまとめた。

「……ややこしいことになってしまつて、本当にすまない」

「でも、圭一郎先輩も本気で心配しているんだ。」

本当は先輩、子供が大好きなのに……」

頭こそ下げなかったが、つかさと咲也の謝意は、十分過ぎるくらい一行に伝わっていた。

「ま……本気には、本気でぶつかるしかあらへん。

はなに期待しとこか……なー、はぐたん」

「……はぎゅ〜」

泣き止みこそしたものの、はぐたんの表情は曇ったままだ。

「………。あの」

その時。つかさが動いた。

「……そんな場合ではないと、分かっているんだが」

「ん？ shouldn't しました姉さん、そんなにはぐたん見つめて」

「………。その。はぐ……たんを。抱かせてくれないか？」

「ああ……何て可愛いんだはぐたん……！」

「ですよね！ はぐたん、やつぱりきやわたーん！」

「はぎゅ〜！」

『きやわたん!!』

一瞬で意気投合した、つかさとほまれの姿を前に。

「ほまれちゃん、そういうキヤラだったんだ……」

「ま、はぐたんが喜んどうからええか……」

目を丸くする、咲也とハリイであった。

2

「はー！ はー！ はー！」

圭一郎に合わせ、制服のまま走る訓練をしたからか。

「ぜー！ ゼー！ ゼー！」

いつも以上に、息が上がるはな。

「……そんなに息を吸い込むんじゃない。過呼吸になる」

見かねた圭一郎が足を止め、はなを支えた。

「でも……私！」

「いいから……せめて水分を取ってくれ。俺も取るから」

はなを椅子に座らせ、呼吸を整えさせる圭一郎。ストローの付いた給水ボトルを、そつと手渡し、告げる。

「ゆっくりだぞ。ゆっくり飲むんだ」

「……………はい」

ようやく落ち着いてきたはなが、言われた通り、少しずつドリンクを口に入れていく。

「……………ありがとうございます」

「礼には及ばん」

はなの息が完全に整ったのを確認して、圭一郎は。

「一つ聞きたい。君は——」

『君』じゃないです。『はな』です」

「……………。そうだな、すまない。」

はなちゃんは、どうしてそこまでして、プリキュアとして戦おうとするんだ？

どうしてはなちゃんは、プリキュアになったんだ？」

その圭一郎の視線に、先のような鋭さはなかった。

だからこそ、はなは正直に答えた。

「……………超イケてる大人のお姉さんに、なりたいたいから」

「超……………イケてる？」

「……………おかしいですか？」

「まさか」

その圭一郎の言葉に嘘はない。その目が、表情が、何より物語っていた。

うつむきながらも、はなは話を続ける。

「初めてはぐたと、ハリーと会って。」

はぐたんが、オシマイダーに襲われた時です」

静かに、はなの話を耳を傾ける圭一郎。

「確かに怖かった。ハリーも止めてくれた。

でも、それ以上に、はぐたんを守りたいって思ったんです」

『ここで逃げたらカッコ悪い！』

『そんなの、私になりたい「野乃はな」じゃない！』

「……………つまり、はなちゃんは。

自分の意志で戦いたい、いや『守りたい』と思って。

だから、プリキュアになった、なれたんだな？」

「……………はい！」

「……………それが知れたかった。ハリーくんも、とても年下の子

に、赤ん坊を守るような男には見えなかったからな」

「勿論です！ それに、私だけじゃない！

さあやも！ ほまれも！ えみるもルールーも！」

「ああ。そうなんだろうな……………」

「……………だから。返してほしいんです。プリハートを——」

が。圭一郎は、敢えてその言葉に応えず。

「俺も子供の頃、そうだったよ」

「え？」

「近所で通り魔事件が起こって。居ても立っても居られなく

てな。竹刀やヘルメットや、子供の思いつく限りの武装をし

て、通り魔を捕まえてやろうと思ったんだ。

でも、それを止めてくれた大人がいた」

『何で悪い奴、捕まえちゃダメなんだよ！』

『犯人を捕まえるのは、僕たち警察の仕事だ』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

「そしてその警官は、言葉通り、通り魔を捕まえてくれた。その姿は、今も目に焼き付いているよ」

「……だから。圭一郎さんは、おまわりさんに？」

「ああ」
大きくうなづく圭一郎。

「……もしかししたら、俺もはなちゃんと同じかもしれない。あんなカッコいい、イケてる警察官になりたいと思っただら。必死に努力して、国際警察に入ったんだ」

「……そう、ですか……」

はなの顔に、徐々に笑みが浮かび始める。

「カッコいい、イケてるお兄さん、か……」

「だが——」

しかし対照的に、圭一郎の顔には影が差す。

「時々思うよ。今の俺は、あの時の警官みたくなれているかどうかって。」

それこそ、イケてるお兄さんになれているかどうか——」

「そんな！」

「そうさ。今もギャングラー犯罪は続いて、決定的な歯止めをかけられてはいない。

それに加えて、未だ快盗だつて捕まえられていない。共通の敵とはいえ、ギャングラーを倒すため、やむを得ず快盗と手を組んだことすらあった。国際警察が、快盗とだぞ？」

全く……情けない限りさ」

「そんなことないです！」

立ち上がり、はなは圭一郎の言葉を真つ向から否定した。

「私たちだって、本当は分かっているんです！ 圭一郎さんが、意地悪してプリハートを取り上げたんじゃないって！」

「はなちゃん……」

「私たちのこと、本気で心配してくれて！」

「私たちのことも、守りたいから……」

必死に言葉を紡ぐはなを見て。

思わず、圭一郎は微笑んだ。

「待ってくれ。それじゃ、はなちゃんも困るだろう？ プリハートを返してほしいって言ってるのに……」

「それもそうだけど！」

今は、圭一郎さんのことのほうが大事です！

フレフレ、パトレンジャー！ フレフレ、私！」

「……ハハ、ありがとう」

笑って立ち上がり、圭一郎が右掌を差し出す。

「……こちらこそ！」

はなはその圭一郎の手を、力いっぱい握りしめる。

「…………だが、プリハートのこととは別だぞ？」

「あれ？」

解り合えたと喜んだはなだったが、そこまで圭一郎は甘く

なかった。

「クライアス社の侵略活動は、国際警察も把握している。

だが俺たち国際警察は、ギャングラー犯罪で手一杯だから

……そうだな、組織犯罪に対しては、銀河連邦警察が——」

その時。圭一郎の左耳のインカムに、通信が入った。

「ああつかさ……何、ハリーくんが襲われた!? クライアス社にか!？」

「ハリーが!? まさか、あのビシンっていう……」

「何か知っているようだな。プリハートの件は後だ！」

はなちゃん、協力を頼む！」

「はい！」

「……はなちゃん、基本的に左手では敬礼をしない。右手でこうやるんだ」

「めちよつく！」

「遅れてごめん！」

「……!? あの子がビシンか!」

「ハハハ、凄いだろウハリ〜?」

国際特別警察機構日本支部近くの道路に、はなと圭一郎が駆けつけると。

既に「発注」していた、保育士の格好をした猛オシマイダーに乗ったビシンが、怪しい笑みを浮かべていた。

「ビシン! 何回來ても同じや、俺はクライアス社には戻らん——」

「そんなことはどうでもいい！」

「……。えー」

圭一郎に台詞を遮られた、妖精体のハリーが呆然とする。

「確か、ビシンといったな？」

「え、僕？」

「君はまだ子供じゃないか！」

「それがあ? ヘンなの」

ビシンには、圭一郎の言葉の意味が分からないようだ。

「クライアス社は、凄い力をくれたんだ。一回手術を受けただけでね……」

そのビシンの、歪んだ笑顔、曇った瞳に。

「手術だど!?」

圭一郎だけでなく、咲也、つかさも。

「こんな子供に……『戦わせていた』のは、クライアス社のほうだったのか……何てことを！」

「ああ、おそらくは改造手術の類だろう。しかも、洗脳されている可能性もある！」

「ゴチャゴチャうるさいよ! 大体誰だ、お前ら！」

《モウオシマイダー!》

圭一郎に襲いかかるが——
『国際警察の権限において、実力を行使する!!!』

その爆風の中で三人は、VSチェンジャーにVSビークルのトリガーマシンをセットした。

『警察チェンジャー!!!』

《1号! 2号! 3号! パトライズ!》

《警察チェンジャー!》

《PATRANGER!》

『パトレン1号!』

『パトレン2号!』

『パトレン3号!』

『警察戦隊! パトレンジャー!!!』

「……パトレンジャー?」

興味なさそうなビシンだが、三人の意志は堅い。

「あの怪物を止め、彼を保護する！」

いくぞ、咲也、つかさ！」

『了解!!』

が——

「何イ!？」

「効かない!？」

パトレン1号、2号の、VSチェンジヤーの銃撃が、猛オシマイダーをすり抜けてしまう!

「ハハ、無駄だよ無駄!」

ビシンの言葉に嘘はないようだ。3号が叫ぶ。

「圭一郎! ルパンコレクションであるVSチェンジヤーが効かない以上、やはりプリキュアの力でなくては、あの怪物には対抗できない!」

「くっ……だが、トリガーマシクレインとドリルなら……」

「それも効かなかったらどうする!？」

圭一郎! 私たちの職務を忘れたか!？」

その時——

不穏な空気を一喝するが如く。

ギターの爆音が、辺りに響いた。

「——そこまでなのです!!」

そのギターの主は、プリキュア一行から一步前に出た、愛崎えみる。

紫のリボンの絵が描かれた、ハート型の真っ赤なギターを堂々と抱えていた。

隣りに、お揃いのギターを持つルールを伴って。

「ただ攻撃するだけが、プリキュアではないのです! オシマイダーは『浄化』するものなのです!」

「それを……私たちが証明してみせます」

ふたりは揃って深呼吸し、ギターを構えて。

『あふれだすオモイ♪ ハートが叫んでるよ♪』

「大好き♪」

「大好き♪」

ふたりのデュオユニット「ツインラブ」の持ち歌。

「大好き∞無限POWER」を唄い始めた!

そのふたりのギターの旋律で。

そのふたりの歌声で。

《……オシ……マイダー……!》

猛オシマイダーがガラガラ棒を落とし、頭を抱え始める。

「効いている!？」

「これが、プリキュアの力……なのか」

驚きを隠せない、3号、1号。

と——

「!? 何だと!？」

1号が——律儀に隠し持っていた——プリハートのうち、

二つが光を帯びて、えみるとルールスの元へ飛んでいった。

「……ふたりの唄に、プリハートが反応したというのか……」

3号も、マスクの下で目を丸くした。

「くそっ……うるさいんだよ!」

と、業を煮やしたビシンが、そうはさせじとえみるたちに直接襲いかかるうとしたが。

「させるか!」

「!」

落ちてきた大きな枝と葉に阻まれ、足止めされてしまう。

2号が、道のそばの大きな木の枝めがけて、VSチェンジヤー

で狙撃し、ビシンの動きだけでも止めようとしたのだ。

「咲也さん! ありがとう!」

「直接攻撃ができないなら、こうすればいいんだよね？」

プリキュアの戦い方を悟り、またそのパトレンジャーの狙撃力を發揮して。2号が、はなにサムズアップした。

「さあ、ルールー！」

「はい！」

プリハートを手にしたえみる、ルールーが――

「ミライクリスタル！」

「ミライクリスタル！」

それぞれレッド、パープルのミライクリスタルを、プリハートにセット。携帯電話型から、ハート型へと変形させた。

『ハート、キラッと！』

プリハートを操り、ふたり揃って、手を、息を合わせて――

『輝く未来を、抱きしめて！！』

みんな大好き！！ 愛のプリキュア！！』

「キュアマシェリ！」

「キュアマムール！」

ふたりのプリキュアが、変身を遂げた！！

……続けざまに取り出したるは、先のお揃いのギター。

プリキュアのアイテムとして、更に装飾の増えた「ツインラブギター」を、ふたりで手に取る。

『ミライクリスタル！！』

そのギターに、ルージュとバイオレットのミライクリスタルを装着。

「Are You Ready?」

「行くのです！」

アムール、マシェリがツインラブギターを奏でる。

その様を、1号は――圭一郎はしかと見つめていた。

(……これが、俺たちには出来ない戦い方……)

『届け、私たちの愛の唄！！』

「心のトゲトゲ！」

「ズッキュン撃ち抜く！」

それぞれのギターを、アムールアロー、マシェリバズーカとして構え直して。

『ツインラブ・ロックビート！！』

赤と紫のハートを先頭にした、ふたつの浄化光線が交錯し

合い、猛オシマイダーに直撃した！

《モウヤメサセテモライマス……》

「愛してる♡」

「センキュー！」

浄化された猛オシマイダーに向けるかのように、ふたりの愛のプリキュアが、トドメの言葉を投げかけた――

「――待て！」

「……僕は、諦めないよ……ハリー！」

1号の静止を無視し、捨て台詞を吐いて姿を消すビシン。

「……オー！ ブラボー！」

「何拍手してるんだ、咲也。そんな場合か」

いつの間にもノリノリになっていた2号に、3号が忠告する。一方の1号は、変身を解き、はなに駆け寄る。

「……はなちゃん、あの二つのプリハートのことは後だ。

確か、トゲパワワ……だったか？」

「はい！ 近くに、トゲパワワを奪われた人が……」

「猛オシマイダーの、素体にされた人がいるはずです！」

「助けにいかう、ってわけね。そろそろ、目を覚ましている

だろうけど……」

さあや、ほまれも続き。

猛オシマイダーが生み出される際に犠牲になった被害者を、搜索し始める一行。

と——圭一郎たちのインカムに通信が入った。

「ギャングラー反応!? こんな時に——」

事務ロボット「ジム・カーター」から、リーダーに反応があったことを知る三人だったが……

「……すぐ、そばにいるって——」

「まさか……」

咲也、つかさが啞然とする。

はなたちが支え、起き上がらせていた人間は。

破けた服から、張り付いた背中の金庫が飛び出していた。

そこから、トゲパワワの残滓が漏れ出ている……

「間違いない……」

圭一郎が結論付ける。

「あの猛オシマイダーは、このギャングラーから生まれたんだ！」

3

「ダメだ!! 危険すぎる!!」

「そんなことはありません!!」

再び、圭一郎とはなが睨み合った。

ギャングラーを確保し、国際警察日本支部に戻った一行。

圭一郎たちが取り調べると、そのギャングラーは日本支部の付近にある保育園で最近働き始めた、「保育士」だという。

その一方で、ギャングラーという指摘には、首を傾げていた。自分は普通の人間だと、驚くのみ。

その反応は本心だと、圭一郎たちは判断した。

彼は、「ギャングラーの自覚がないギャングラー」なのだ。

……しかし、背中が付いている金庫から、ルパンコレクションの反応がある以上、彼がギャングラーであることは間違いない。

いわば彼は、「人間」をモチーフにしたギャングラー。

「アンドロイド」と言い換えてもいいかもしれない。

——ルパンコレクションについては、後でノエルに頼み、金庫を開けてもらうとして。

今後の彼の処遇について、頭を悩ませていたところで。

はなが乱入し、ますますややくしくなったのだった。

「アンドロイドなら、分かり合えるはずです!」

「ルールーちゃんと一緒にしてはいけない! 彼はギャングラーなんだ!」

はなちゃんたちは、もうこの案件に関わってはいけない。

ここからは、我々国際警察の管轄だ」

「トゲパワワは本来、人間からしか放出されません」

そこに、ルールーが解説を入れる。

「私は今でも、身体はアンドロイドです。」

しかし私は、主にえみみるとの交流により、アスパワワ——プリキュアの力の源が放出されるようになりました。

ならば、トゲパワワが放出された彼も、私と同じように、人間として生きていける可能性は否定できません」

「……ギャングラーが、人間社会で暮らせる……というのか」

つかさが考え込む。その表情は、価値観が変わっていくかのような——まるで何かの希望を抱^{いだ}いているかのようだ。

「そもそも、あのギャングラーさんは、何か悪いことをしたんですか？」

「ただギャングラーってだけで捕まえること自体、おかしいんじゃないですか？」

「……うん。それは、その通りだ」

さあや、ほまれの指摘に。咲也もまた、熟考して肯定した。

「——しかし、それすらギャングラーの作戦という可能性もまた、否定できない」

「圭一郎さん！」

「……すまない、はなちゃん。だが——」

はなの抗議に対し、真剣に圭一郎は話し出した。

「俺たちは、国際警察として実力行使する権限を預かっている。当然、その権限には、相応の責任が伴う。」

『人々の安全と平和を守る』——
その責を果たすには、あらゆる方面から物事を考えねばならない」

「そうやって、最初から疑ってかかることがですか!？」

「その通りだ。それもまた、我々の職務であり、義務だ」

圭一郎は、はなの指摘を否定しなかった。

今度は一転。はなの哀しそうにも見える眼差しと、冷静に徹する圭一郎の眼差しが、静かに交差した。

「……圭一郎」

それに割って入ったのは、つかさだった。

「一つ、忘れていないか？」

「つかさ？」

「元々、はなちゃんたちは『お仕事体験』として、国際警察にやってきたんだ。」

ならば、その『お仕事体験』の一部として、彼女たちにも協力してもらうのは、どうだろうか？」

「……協力？」

「ああ。幸い、彼女たちは夏休み中。時間はあるはずだ。」

だから、あのギャングラーと、なるべく行動を一緒にしてもらおう。」

それが、『ギャングラーへの監視』となるか、『友達の手伝い』となるかは、彼女たち次第。それでどうだ？」

「分かりました。保育士の仕事なら、任せてください」

「私たちは何度も、保育士のお手伝いをしたことがあるので——
す!」

ルール、えみるが、つかさの案を快諾した。

「……ダメだ。やはり危険だ」

「先輩! 僕は、彼女たちの気持ちを尊重したい。」

——はなちゃんたちならできると、信じます!」

「だから——」

咲也が反論するが、圭一郎の返答は——

「俺も、はなちゃんたちと同行する。」

その間、二人にはここで待機を頼みたい。

何かあったら連絡する……それでいいな、咲也、つかさ」

「先輩!」

「圭一郎!」

「圭一郎さん……ありがとう!」

咲也、つかさだけでなく、はなにも笑顔が戻った。

(……プリハート没収の話は、どこに行ってしまったんやらな……)

「はぎぎゅ〜」

一同のやり取りを遠巻きに見つめつつ、これ以上ややこしくしたくないので、心中でつぶやくのみに留めるハリー。が。それでも、明らかになっていない重要事項があった。

「……すみません。一つ、聞きたいんですけど」

「ハリー？」

「どうした、ハリーくん？」

振り向くはな、圭一郎に、ハリーは尋ねた。

「さつきから『あのギャングラー』ってばかり言うてますけど、そのギャングラーはんの名前は、何なんですか？」

『……………』

はなと圭一郎が、苦そうな表情で顔を見合わせる。

「あの、その……………」

「人の名前をからかうのは、失礼だと解っているんだが……」

「は？ どういうこと？」

「……あのね、ハリー」

「彼の名は、『ギャン・九良』^{くら}というそうだ」

「……………。マジですか」

適当過ぎという指摘を飲み込んで、ハリーが事情を悟った。

「……………ほら、こっちおいで〜」

圭一郎が両腕を広げるも、誰も寄ってこなかった。
「……………」

「圭一郎さん、表情硬すぎなのです」

「子供たちが怯えている平均確率、85・6%です」

冷たい指摘が、えみるとルルーから飛んだ。

(何故だ……俺はこんなにも、子供が好きだというのに……)

と、仕事熱心な男性保育士——九良が声をかけた。

「圭一郎さん……私も同じようなものですから。どうしても心を開いてもらえず、同僚を困らせてばかりです……」

「……ありがとう、九良くん」

彼の肩を叩いて、礼を言う圭一郎。

(……この感触。確かに、普通の人間と同じだ)

背中の金庫も小さく、服を着てしまえば目立たない突き出

方のため。傍目からでなくとも、ただの人間と思えた。

中肉中背、黒い短髪。背中の金庫さえなければ、本当に平

凡な容姿。それが、ギャン・九良という青年だった。

(しかし、あの金庫の中にルパンコレクションがある以上、

九良くんはギャングラーに与する存在だ)

(もし、もしもだ。暴走した時、子供たちを守るのは——)

「圭一郎さん……助けてえ……」

と。呼ばれた圭一郎が目を向けると。

髪を、口を引つ張られ。幼児たちに、もみくちゃにされて

いるはなの姿が、そこにあった。

「……はなってば、いつもこうなんです」

「ホント、好かれ過ぎ」

「俺は……少し、羨ましいかな」

さあや、ほまれの補足を受け。圭一郎がはなに近寄ると。

「……………」

「……………」

波が引くように、子供たちははなの元から——厳密には、近づいてきた圭一郎から離れていった。

「……………」
「怯えている確率、92・6%に上昇です……………」

申し訳なきように、ルールーがつぶやいた。

「ならばっ！」

そこでえみるが取り出したのは、先の赤いギター。

「ちよっと待ってくれ、えみるちゃん！」

またギターを勢いよく鳴らしたら、子供たちが驚いて——

「ギターは自由なのです！　ギターが奏するのはロックだけじゃない、バラードだって何だって弾けるのです！」

圭一郎の前で、えみるがその言葉を証明してみせた。

そつと弦を撫でると、アコースティックギターのような、静かな。だが、温かい音が流れ始める。

それに合わせ、えみるはそつと唄い出した。

「とどきたいこと♪　あるんだ♪」

きみのこと♪　すきなんだ♪」

子供たちが、一斉にえみるのほうを向く。

「ふたりのハート♪　リボンでむすぶ♪

ともだちに♪　なるうよ——」

——気づけば。ルールーも加わって。

『キミと♪　わたし♪　デコボコ♪

ぜんぜん♪　ちがう♪　ふたりだね♪』

——そして、子供たちも、鼻歌や手拍子で混ざり始め。

『けれど♪　ハート♪　ハグ重ねたら♪

まあるくオツケーだよ♪』

その時。

一人の子供が、圭一郎の手を握った。

「ずつとずつと♪」

「ずつとずつと♪」

圭一郎だけでない。

九良の周りにも、子供が集まり始めた。

『ともだち♪

ハートをリボンで♪　結ぼう♪』

目元をぬぐいながら、九良がえみるとルールーの、それぞれの手を握った。

「凄いや！　あんなに子供たちを懐かせるなんて！」

「いや、それ程でもあるのです〜」

「この曲は、えみるが創ってくれた唄なんです」

満面の笑みと、優しい笑みで、えみるとルールーが応える。

「この曲、楽譜とかある？」

私もピアノで弾いて、唄の練習をしたいんだ」

「勿論なのです！　この子たちにも唄ってほしいのです！」

すつかり興奮した様子の九良。

圭一郎は、その輝いている瞳を見つめて——

(……………もしかしたら)

(杞憂だったのかもしれないな。俺の心配は……) 一つの間にか、子供たちに囲まれていた圭一郎。座って、その相手をしながら。ふと、はなに目をやると。未だもみくちやのままだったはなが、それでも。笑顔で、サムズアップを圭一郎に返した。

——そうして、夢のような数日が過ぎていった。子供たちが圭一郎に懐き。

ギャングラーが——いや、いち保育士のギャン・九良が。子供たちを楽しませ、交流している。

そしてそれを、嬉しそうに見つめるはなたち。

彼の望んでいた平和が、そこにはあった。

この日々は。いつまでも続いていくかのように思えた。そう、時が止まったかのように——

所は変わり、国際警察日本支部——

「……………」

「ノエルさん!？」

「何処に行っていたんだ、ノエル……………」

待機中の咲也、つかさが立ち上がり、目を丸くする。いつもの胡散臭そうな、陽気のないノエルの姿に。

「……………咲也くん。つかさくん。話がある」

いつにない真面目な表情で、ノエルが語り出した。

「ギャングラーの、本当の狙いが解った——」

「なあんだ……………」

『実験体』を改造中の、ギャングラー幹部にして女医である、ゴーシユ・ル・メドウがつぶやいた。

「あの赤ん坊は、異世界へのゲートを開けた訳じゃない。

別にわざわざ呼び出さなくたって、プリキュアなんてあの世界の、そこら中にいるんじゃない」

その唇が、怪しくつり上がった。

「それじゃ……………もう用済みね」

4

「どうした……………どうしたんだ、九良くん!」

「九良さん!」

九良の買い出しに同行した、圭一郎、はなが駆け寄る。

突然、火花を散らして。九良が道端に倒れたのだ。

「そんな……………これじゃ、あの時の……………ルールと同じ……………」
「落ち着くんだ、はなちゃん。下手に動かしてはいけない。今、つかさたちに連絡を——」

「あら、それは困るわね」

そこに、異世界から現れたゴーシユ。

「——ゴーシユ、貴様の仕業か!? 九良くんは何をした!？」
「すかさずVSチェンジャーを抜き、ゴーシユに銃口を向け

る圭一郎。

「まあ、『九良くん』だなんて。

適当につけた名前なのに、随分と親しく呼ばれているのね」

「九良さんは九良さんだよ！」

「下がれ、はなちゃん！」

圭一郎に守られながらも、その背の後ろから抗議するはな。

「出来損ないのギャングラーに、どうしてそこまで肩入れするのかしら。全然分らないわ」

「ギャングラーじゃない！ 九良さんだよ！」

子供が大好きで、いつも子供のことを考えていて、一緒に保育士さんのお仕事をしてくれた——

「可哀想ねえ。そんなに親身になっちゃって。たかが出来損ないに」

「出来損ないなんかじゃない！ 九良さんは——」

「——でも、彼には目的があつたんだ」

「ノエル!」

そこに駆けつけたのは、ノエル。咲也、つかさも一緒だ。

彼ら呼び出したのだろうか、さあや、ほまれ、えみる、ルーラーも共に現れた。

「保育士の『人間』として戸籍を偽造し、保育園へ潜入。

そして、『伝説の戦士』を呼び出せる程の力がある赤ちゃん、『はぐたん』を探すというね」

「はぐたんを!」

突然出てきたはぐたんの名に、はなが驚愕する。

「で、でも……昨日、ハリーのはぐたんを連れてきてくれて……九良さんは、一緒に遊んでくれた! 唄ってくれた!」

笑って、はぐたんを抱っこしてくれた!

だから、そんなはずない! 九良さんは——」

「……だが、事情が変わった。そうなんだろう?」

はなの必死な表情から目をそらし、ノエルは静かな怒りを胸に秘め、ゴーシユに問うた。

「そうよ。あの出来損ないは、あくまでテスト。同じタイプのギャングラーを増やして、沢山の保育園に送る予定だった。

でもあの赤ん坊の力は——少なくとも、ギャングラーに必要な能力ではないと分かった。

だって、プリキュアはこの世界に幾らでもいるんだもの」

「……ああ。その通りだ。宇宙警察等、他の警察組織のデータを調べ、僕も知らないプリキュアのチームを複数確認した。

その中には——『伝説の戦士』と呼ばれた、『ふたりはプリキュア』——キュアブラック、キュアホワイトもいた」

ノエルが補足した。ゴーシユの言葉がブラフでないことを、一同に伝えるためにだろう。

「あの赤ん坊は、異世界へのゲートを開けて、『伝説の戦士』を召喚した訳じゃない。その程度なら、狙う必要もない」

「だから——切り捨てたというのか!?! 九良くんを!!」

対照的に、熱い怒りを隠さない圭一郎。

「ええ。最初から、大して期待していなかったもの」

「……………」

無言で、ノエルが解析装置を取り出し。九良の服をそっと脱がせ、背中の金庫に貼り付けた。

ゼロ　ゼロ　ゼロ
《0! 0! 0!》

《シャキン!》
「暗証番号まで適当なら……」

ノエルが、開いた金庫を開けると——

「中身も適当だね……!!」
ノエルが見せたのは――

『ハにズレと書いて何と読む?』
と記された、紙切れだった。

「この紙に、丁寧にルパンコレクシヨンの反応まで偽装する
なんて。結局、手が込んでるじゃないか」

「貴重なルパンコレクシヨンを、こんな出来損ないのガラク
タに与えると思う?」

「ガラクタなんかじゃ――ない!!」
「……ギャングラアアアア!!」

遂に、はたと圭一郎の怒りが爆発した。

「九良さんを――」

「九良くんを――」

「何だと思ってるの!?!」
「何だと思ってるんだアアアア!!」

「あら? そんなにこのガラクタに、役に立ってほしいの?」
そのゴーシュの反応に――

「!! いけない!!」
ノエルが反応するが、一足遅かった。
ゴーシュが腕から、九良に向けて、怪しい光弾を発射した。

と――
みるみるうちに、九良が――人型ギャングラが巨大化し
ていく。それが、ゴーシュのルパンコレクシヨンの力なのだ。

その様を見上げ、茫然としながらつぶやくはな。

「……え? え? 何で……?」
「私の可愛いお宝さん。あのガラクタに、少しでも使い道を
与えてあげて」

捨て台詞を残し、その場から消えるゴーシュ。
「オオオオオオオオオ……」

その唸り声、そして白目を剥いた表情からは。
ついさっきまでの、九良の様子は微塵も感じられない……

「――圭一郎!!」

「先輩! 行きましょう!!」
パトレンジャーは本来、ギャングラへの対抗組織として
結成された戦力部隊だ。

ギャングラが起す被害を止めるために、トリガーマシ
ンを巨大化させて、応戦せねばならない。

が。つかさ、咲也の呼びかけに、圭一郎は。
「俺は……後から行く」

『え!?!』
「……分かったよ、圭一郎くん。二人とも、先に行こう」

ノエルに促され、先行して鎮圧に向かう二人。

その時、圭一郎の瞳に映っていたのは――
「……何で? ……どうして? こんな、酷すぎる!」

真っ先に救うべき、狼狽した一人の女の子だった。
「どうしてなの!?! あんなに優しくかった九良さんが……」

「はな……」

「はな!」
「はな先輩!」
「……はな」
仲間たちの呼びかけにも応えられず。

その場にうずくまるはなに、圭一郎はゆっくり近寄った。
「――はなちゃん」

しゃがみ込み、その潤んだ目を見つめて。その名を呼んだ。

「お前たちも『戦隊』を名乗るなら!!
子供の未来くらい!! 守ってみせるオオ!!」

その1号の言葉が。
三人の快盗に。

「奪われた未来」を——
「奪い返したい大切なもの」を——
呼び起こさせた。

「快盗オオオオオ!!!! そのためなら、俺は何だってする!!」
土下座でもしそうな勢いで、まくしたてる1号に。

「……つたく、うるせえよ。分かった分かった!!」
首肯したレッド。仮面の奥で同意するブルー、イエロー。
話がまとまったところで。ルパンエックスが、グッドスト
ライカーに呼びかけた。

「ウィー……じゃあ、頼んだよ! グッドストライカー!」
「オイラに任せろ、ノエル!!」

《超越エックスガッターイム!》

《グッドクルカイザー!》
 ブイ エス エックス
 V! S! X!》

グッドストライカーを中心に。
快盗と警察の、計十機のV S ビークルが合体し。
グッドクルカイザーV S Xが、その圧倒的な体躯で、巨大
人型ギャングラーに立ち塞がる。

これ以上、子供たちを悲しませないために。
子供たちの未来を、守るために。

「……で、どうするんだ。熱血お巡りさん」

レッドの間に。熱気を一度胸に秘め、1号が答える。

「このまま、ギャングラーの動きを止める」

「はあ!? 倒すんじゃないのかよ」

「ただ攻撃するだけが、『戦い方』じゃない。

何より、『倒す』ことを、彼女たちは望んでいない」

(圭一郎くん……君は……)

同じコクピット内で、レッドと1号のやり取りを静かに聞
きながら、エックスが「圭一郎」の真意を悟る。

「……彼女たち?」

「ああ。必ず——来る! それまでの足止めだ!」

「相変わらず、面倒くせえお巡りさんだぜ……」

しゃーねえ、付き合ってやるよ!」

「あんなこと、九良さんは望んでいない……」

遠くの空に望む、巨大化させられた九良と、グッドクルカ
イザーV S X。それを見つめて。

「九良さんのなりたかった、『ギャン・九良』じゃない!」

はなが。少しずつ。ゆっくりと……立ち上がる。

「だったら、私たちが取り戻す。それができないなんて……」

私になりたい『野乃はな』じゃない!!」

『ミライクリスタル!!』
『ハート、キラッと!!』

「輝く未来を、抱きしめて!

みんなを応援! 元気のプリキュア、キュアエール!

「みんなを癒す! 知恵のプリキュア、キュアアンジュ!」

「みんな輝け! 力のプリキュア、キュアエトワール!」

『みんな大好き!! 愛のプリキュア!!』

「キュアマシェリ!」

「キュアアムール!」

『HUGっとプリキュア!!』

「——圭一郎さアアアアアん!!!!」

変身した途端、全速力で走り出した、キュアエールの呼びかけに。大声で応える1号。

「——待っていたぞ、プリキュア!!」

「え、え? あれがプリキュア!?」

「……思っていたより、派手だな」

「何だか、女の子の戦隊みたいだね……」

初めて直視したプリキュアの姿に。レッド、ブルー、イエローが、呆気にとられながら、つぶやいた。

続けて現れた、四人のプリキュアと共に。

グットクルカイザーV SXの肩の上に、五人が飛び乗った。そしてエールが、ちゃんと右手で敬礼してから。

「私たちも戦います! 九良さんのために!」

「ああ、俺たちもそうだ!」

エールと1号が。

「九良さんが望んでいた未来のために!」

「そうだ、その通りだ! プリキュア!」

アンジュと3号が。

「私たちプリキュアの力で、九良さんを救います!」

「うん! 僕たちも手伝うよ、プリキュア!」

エトワールと2号が。

それぞれ敬礼し、互いに息を合わせる。

「……何、盛り上がっちゃってんの?」

「いいから快盗さんも、手助けするのです!」

「説明は後です。よろしくお願いします!」

完全に取り残されたレッドには、マシェリとアムールの、冷たい言葉が返ってきた。

《おお!! 何かテンション上がってきた!!》

が、グッドストライカーにはその熱さが伝わったらしい。

《プリキュアにグツときちまったぜ! 俺も手伝——》

「おい待て! ここでお前がいなくなったら、合体が解除されちゃうだろうが!」

慌ててグッドストライカーを静止するレッドだが。

「——いや。それでいこう」

「エックス?」

「ノエル?」

何か策を思いついたらしい。エックスが、レッドと1号に話し出した。

「どうせ合体解除するのなら、ビークルラッシュユストライクで、相手の動きを止めてからにしよう。

勿論、弱点である金庫を外してね」

ギャングラの身体を構成するコアは、あの金庫だ。金庫を破壊すれば、ギャングラは爆散してしまうのだ。

「そして合体を解除したグッドストライカーが、そのまま、プリキュアの元に向かう。そこからは、君に任せるよ」

《おう！ オイラ、いいこと考えたんだ！》

「了解した！ 標的を間違えるなよ、快盗！」

「そっちこそな、お巡りさん！」

エックスの作戦を承諾したレッド、1号が。

同じくうなずいた、ブルーとイエロー、2号と3号が。

エックスと共に、グッドクルカイザーV S Xの合体を解除した！

《グッドクルカイザー！ ビークルラッシュユストライク！》

快盗と警察、全十機のV S ビークルが。

しがみついていた九良を吹き飛ばし、動きを鈍らせる。

その隙に、グッドストライカーが、エールの元に飛来した。

《お！ おあつらえ向きのもの持つてるじゃん！》

「え？ あなた誰？」

《オイラ、グッドストライカー！

お前たちプリキュアに、グッと来たんだ！

だから、手を貸さずにはいられなくってさ！》

「そうなんだ……ありがとう！

私はキュアエール、よろしくね——って、めちよつく!!」

エールが取り出していた、「おあつらえ向きのもの」こと、エールタクトに、グッドストライカーが張り付いたのだ。

《さあ行くぜ、プリキュア！ 突撃用意！》

「これって……どういうこと？」

「……何なの？」

同時に、アンジュのアンジュハープ、エトワールのエトワールフルートが。

グッドストライカー付きのエールタクト同様に、虹色に光

り出した！

《エール、アンジュ、エトワール！ 行くぜ！》

グッドストライカーが叫ぶと——

《一・致・団・結!!!》

「な……何だありや!？」

「な……何だありや!？」

「な……何だありや!？」

「パトレンU号……なの、か？」

V S ビークルから降りたレッドが咄然とし。

1号も、首をひねった。

無理もなかった。

『スーパー!!! めちよ——つつつつく!!!』

『まさか、私たち……!』

『合体しちゃってる!!』

そこには。

キュアエールを中心に——いや、真ん中にして。

右半身にアンジュの、左半身にエトワールの衣装が縫い合

わされた、摩訶不思議なプリキュアが立っていた。

ピンクと水色と黄色の配色。カラフルにも程があった。
『何なのです!?! これ……!』

『理解不能……しかし、エールたち三人の意識が、別個として存在していることだけは分析できました!』

これにはマシエリ、アムールも、驚きを隠せない。

《やったぜ! 一か八かだったけど、試してみるもんだな!》

『やつつけ本番だったのですか!?!』

マシエリのツッコミを無視し、虹色に輝くメロディソードに尚もくつついているグッドストライカーが、宣言した。

《名付けて、「HUGプリU号」!》

『そのまんまだ——ツツツツツ!!!!』

レッド、1号が、ハモリながら絶叫してツッコんだ。
が——

『うん……凄い力を感じる!』

当のHUGプリU号は。

『これなら……できる!』

『イケそうな気がする!』

HUGプリU号の中の、エール、アンジユ、エトワールが、心をつつにしていた。

見据えるは、大木に倒れ込んだ九良。

『行けエエエエ!!!! プリキュアアアア!!!!』

『無茶苦茶だが……やつちまえ、プリキュア!!』

1号とレッドの応援を受けて——

『ミライクリスタル!!!』

虹色に輝いたグッドストライカーに、ローズ、ネイビー、オレンジの、三つのミライクリスタルをセットして。

『エールタクト!』

『アンジュハープ!』

『エトワールフルート!』

三人それぞれの音楽を同時に奏で、それが融合していく。
一方の九良は、動きを止めた。

文字通り一致団結し、最大限にまで膨れ上がった、虹色のエネルギーが、HUGプリU号を包む。

更には、ツインプラギターで伴奏を始めたマシエリ、アムールの力まで加わって、虹色の輝きが増し——

『心のトゲトゲ、飛んでいけ!!!』

遂に浮遊したHUGプリU号が、九良の胸元に突撃した!

『プリキュア・グッドフル・トリニティコンサート!!!』

虹色の、光の中で——

(……九良さん? 九良さん!)

(……)

(私だよ、はなだよ!)

(……)

(お願い、元に戻って!)

(……)

(また、保育園で、子供たちと遊ぼうよ!)

(……)

(お願いだから……返事をしてよ!)

(……………ありが、と——)

エピソード

その時、九良の背中の金庫に、ヒビが入った——

「HUGっとプリキュア……」

グッドストライカーが離れ、元に戻ったキュアエールは。

「エール……フォォー……」

野乃はなは——

「……今回の事件では、本当に、お世話になりました」
後日のこと。

スーツ姿の圭一郎が、菓子折りを持って、ビューティーハ
リーショップを訪れていた。

「はなちゃんは——」

哀しそうに、首を振るさあやたち四人。

「まあ……今は、そっとしておいたほうがええでしょう」

「はぎゅー……」

「——それでも」

暗い表情のハリー、はぐたん。圭一郎は。

「はなちゃんなら、きつと、また立ち上がってくれる。

そう、俺も信じています」

「はな先輩なら、当然のことなのです」

「その確率は、きつと200%です」

かすかに笑みを見せながら、えみるとルールーが同意した。

「……それで、圭一郎さん」

「どうした、さあやちゃん？」

「プリハートの件は——」

「……君も律儀だな。あの時、はなちゃんに返した時に。

そして、君たちが駆けつけてくれた時に。

君たちならクライアス社と戦っていける、そう確信したよ」

「……そうですか。ありがどう……」

「そんな無理して、かしまらなくていいぞ、ほまれちゃん。

俺たちはもう、年齢を越えた『友達』なんだから」

「……そっか。ありがと」

圭一郎の言葉に。ほまれ、さあやにも、わずかながら明るさが戻った。

「だが、俺たちバトレンジャーにも任務がある。時間が空いていれば君たちを助けに行けるが、いつでもとはいかない。

現に俺は、もうすぐ独りでの極秘任務に就くからな」

強盗グループが所持しているVSビークルを取り返すため、美術商を装って彼らに接触するという重大任務だが、それはまた別の話である。

「だから……これを君たちに渡しておく」

圭一郎が取り出したのは、一枚の紹介状だった。

「宇宙警察内の『銀河連邦警察』は、組織犯罪対策を専門としている。

ここには、いわゆる『宇宙刑事』たちが所属していて——俺たちも以前、特別に派遣された宇宙刑事から、『教官』として指導を受けたことがあってね。

確か、君たちとは別のプリキュアとも認識があるとも伺っている。彼女たちも——君たちの力になれるかもしれない」

更に、その宇宙刑事の名が書かれた名刺を添えて、テープルにそつと置いた。

「君たちプリキュアだけではどうにもならない事件があれば、銀河連邦警察を訪ねてくれ。きつと、力になってくれる。

勿論俺たちも、できる範囲で協力する。

——忘れないでくれ。プリキュアだけで——君たちだけで抱え込まないでくれ。

人々の安全と平和を守る、俺たちのような戦士——ヒーローに、いつだって頼ってかれていいんだ」

大きくうなずいたプリキュアたちに。

「……今度は、客として来るから。同僚や友人と一緒に」
敬礼し、圭一郎は去っていった。

曇り空の中。行く宛も考えぬまま。
肩を落として、独りで少女が歩いていった。

(……私、助けられたのかな)

(もつと、プリキュアとしての力があつたら)

(九良さんを……助けられたのかな……)

あれからずっと、思考は空回りするばかりだ。

同じことを考え、結論の出ないまま、また考えに浸る。

(……圭一郎さんは、プリハートを返してくれた)

(……)

(今の私に、プリキュアの資格……あるのかな)

(助けたい人を、助けられなかった)

(私のなりたい「野乃はな」に、なれなかった)

(私のなりたい「キュアエール」に、なれなかった)

(そんな私が……)

その、無限迷宮の出口は——

「——!!」

すぐ、そばにあった。

『とどきたいことー♪ あるんだー♪』

ぴあ、の、の、伴奏と一緒に、子供たちの合唱が聞こえた。

『きみのことー♪ すきなんだー♪』

雲が晴れ、日差しに照らされた、あの保育園が見えた。

「ふたりのハート……リボンでむすぶ……」

そのフレーズを、無意識に口ずさむ。

「ともだちに……なろうよ……」

(……そうか)

(生きてるんだ)

(九良さんのなりたい九良さんは)

(ここに——いるんだ!)

(九良さんと遊んでいた子供たちの中に)

(九良さんは——いるんだ!)

(九良さんは——なりたい自分に、なれたんだ!)

何でもできる!

何でもなれる!

輝く未来を、抱きしめて!

フレ、フレ、みんな!

フレ、フレ、私!

「行つくよ——!!」

光に向かって。

未来に向かって。

野乃はなは、再び走り出した——

もはやあとがきを書く資格すらない程、完成を遅らせてしまいましたが。
一つだけ……

最後、圭一郎が話した。
圭一郎たちを「教官」として指導し、別のプリキュアとも認識がある宇宙刑事の話は。

盟友の有阪嘉人さんが、pixiv に上げた作品。

『宇宙刑事キュリア』

「キュリア・ルパンレンジャー・パトレンジャー 女神の祝砲と光の腕輪」

(<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=9547678>)

から(勝手に)引用させていただきました。

宇宙刑事キュリアが、プリキュアと出逢ったお話も。

同じく、有阪さんの pixiv のアカウントの。

『G o !プリンセスプリキュア』と、宇宙刑事シリーズのクロスオーバー作品。

「羽ばたけ！夢へと向かう輝きの翼！！」

(<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=7289623>)

こちらで読むことができます。

どちらも傑作です。

みどうあや

宇宙刑事キュリアこと御堂 絢、そのパートナーのユリー。

有阪さんのオリジナルキャラも、とてもいい味を出しています。

というか自分は、この『宇宙刑事キュリア』シリーズ自体が、大好きなもので……
是非、ご清覧ください。

それでは、またどこかで。

馳川 HTB

奥付

『HUGっと！プリキュア VS 警察戦隊パトレンジャー』

feat. 快盗戦隊ルパンレンジャー』

「ギャングラーと友達に」

2018年12月14日 公開

文・構成：馳川 HTB

編集・発行：別冊！勝手解釈

E-mail：htbc_proc@yahoo.co.jp

URL：http://www.katte-kaishaku.com/

pixivID：http://pixiv.me/htb_hasegawa